

サンテイアゴ

—— 思いつくまま ——

野間 一正

序

昨年カタルーニャを中心にスペインを旅した折、乗り継ぎや到着時刻を考慮してルフトハンザに乗った。往復十二万円（他の航空会社でも同じ）という。いささか驚いた。私が最初に渡欧したのは、日米新安全保障条約で革命騒ぎとなった一九六〇年の夏だった。BOAC（英国航空）の、南廻りでローマまで三十三時間であった。ローマに十日間滞在後TWAでマドリードに向かった。問題は運賃である。片道二十四万円であった。なんだった四倍じゃあないか、と思うかも知れない。当時は大卒の初任給が月一万円だった。ボーナスを別にすれば、片道切符で二年、往復すれば四年分の俸給がとんでしまうことになる。今初任給を二十万円とすれば、片道四八〇万円往復なら九六〇万円かかるといふ計算だ。当時マドリードの地下鉄は距離に関係なく一律一ペセータだった。今一三〇ペセータ、即ち、一三〇倍。なのに、航空運賃は八十分の一。

姫路のベルギー系スクート会経営の淳心学院で四年間働いたのち、一九六〇年四月、大阪のスペイン系クラレチアン会経営の啓光学園に勤務がかわった。その一ヶ月後、スペイン外務省から、給費留学生に決まったので七月末までにスペインに来るようにとの通知を貰った。生活費、大学授業料、健康保険はスペイン政府持ちだが、往復運賃は留学生負担だった。前年渡欧した人は貨物船で片道七万円とうかがっていたので、そのつもりであった。ところが実際問題として、学期が終り成績をつけたあとでないと出発できないので、空路でなくては間に合わなくなった。結局、父が恩給を前借りして支払ってくれた。

帰途は客船カンボジャ丸で、マルセーユから神戸までスエズ運河経由で約三十日間の航海だった。運賃は三等で十万円。三食つきで、三、四日走ると港に入り、スエズ、アデン、ボンベイ、コロンボ、シンガポール、サイゴン、香港を観光できた。十一月から十二月にかけての

船旅であつたが、熱帯地域を通る時は蒸暑い。三等船室は船首寄りの吃水線あたりにあり窓は明りとりで開かないが、クーラーが働いており問題はなかつた。風であるうと、強風が吹き大波がこようと、船は黙々と予定通り進んでいった。インド洋では荒れて、船先に立って中央のマストをみていると、船の傾斜が激しく海に突っこむのではないかという錯覚におちいるが、一万五千トンの船が沈没する心配はなく、私は船酔いの洗礼をあびずに済んだ。しごく快適で貴重な経験をした。

当時の日本は外貨の持合せが少なく、留学先の誰か金銭面での保証がないと国外に出れなかつた。私の場合はスペイン外務省だつたが、その他に大学生寮、ポルトガルでは文部省とグルベンキヤン財団より奨学金を与えられた。心ゆくまで研究・勉学に没頭できたのは多くの方々の御助力のお蔭と感謝の外ない。「男子志を立てて郷関を出づ学若しならずんば死すとも帰らじ」は、少し大袈裟だが、親の死に目にあえない、或いは、私は結核で五年間も療養せざるをえなかつた前歴もあるので、運が悪ければ、鹿児島島のベルナルドのように病死して異国の土になることもありうる位の覚悟は常に持っていた。実際、ポルトガル滞在中父からの返事が途絶えたので、帰りの切符のこともあり、心配したことがある。しかし、電話をかけるなんて考えられないことだつた。帰国後父

が脳出血で倒れ三日間意識不明だつたこと、たとえ死んだとしても通知するなと言明していたと知り慄然とした。

確かにこの四十年間に海外旅行は驚くほど便利になつた。かつては外貨二百ドル（一ドル＝三六〇円）しか持出しできなかった。そして更に現地の通貨に変えなくてはならなかつた。今は外貨は自由に使え、例えばスペインの場合、日本国内でベセータを現金でもトラベラーズ・チェックでも買えるし（二年後ユーロが日常流通するようになれば更に便利）、クレジット・カードでホテルでも書店でもレコード店でも支払できる。電話だつて同じ支払方法もあり、しかも即座につながり、料金だつて国内料金に較べてそんなに高いものでない。ただ、怠け者で無器用な私には、ある程度の便利さを棄て切つた一種の隔離状態で勉学・研究に専念できたことは有難かつた。

スペインでは年々物価が上昇している。学生時代、清潔で家族的なペンシオンは一泊二食つき六十ペセータ、即ち、一日一ドルで国内旅行でできた。今は安全面（かつては、真夜中に一人で歩いていても安全だつた）から原則として四ツ星のホテルに泊ることにしているので、ペンシオンが今いくらか正確には知らない。ただ、ホテル代がすごく高くなつたことからおよその見当はつく。スペインは「物価が安い」そして「安全」という神話はずれさつた。一昨年マドリードの銀産通りとも言うべき

グラン・ビアで警戒中の警官から、「このあたりで日本人が狙われるので注意するように。犯人はアラブだ……」と警告をうけた。そして昨年バルセロナ、ロマネスク美術の宝庫カタルーニャ美術館からの帰途、地下鉄の切符を買い三番線のホームに通じる階段を降りている時うしろから力づくで鞆を奪われた。切符売場の係はここから若者三人が走って逃げて行った、とのんびり言うだけである。警察に行くと、被害届を出させたあと、犯人はアルジェリア人だと言う。それなら、何故捕えないんだと言いたくなる。地方の都市に行けば、静かで安全で落ちていているが、マドリードとバルセロナ及び有名観光地ではこの種事件が多発しているようである。警官が犯人を簡単に北アフリカ人と断言してしまふのは、今更「マタモロス」でもあるまいしと思う。しかし、最短距離僅か十四キロのジグザグタル海峡を渡り不法入国し、路上で寝たり、地下鉄構内に屯したり、無気味なことは確かだ。

中世のサンティアゴ巡礼においても、天災人災のみならず、巡礼を食いものにする不届き者がいた。そのため、巡礼者を保護する種々の団体・施設がつくられ、また巡礼者同士助け合った。一九六〇年ごろのスペインの列車で旅していると、大ていの人々は革袋にぶどう酒を詰めて持ち歩いており、自分が飲む前に同席の人に先ずすめ



オビエドの「フォノ・アストゥール」より出ている
CD「コンポステラへの道」のジャケット

たものである。そこから会話がはずみ、車窓に映る自然の美しさのみならずスペイン人の心のやさしさにもふれたものである。世紀末を迎えそのような美しい風景がみられなくなった。「旅は道連れ世はなさけ」という言葉は死語になったのであろうか。二十一世紀になれば人は再び美しい心を取り戻すであろうか、それとも、機械人間という人間性を失った人々の群れが地球上を跋扈するのであろうか。

—
サンティアゴ・デ・コンポステーラ（星の野の聖大ヤコブ）、中世のヨーロッパ・キリスト教世界における三大巡礼地の一つである。キリストの聖墳墓のあるエルサレム。次いで、ペテロが殉教しラテン教会の大本山教皇庁の所在地ローマ。そして、イベリア半島の西北端にあるサンティアゴ・デ・コンポステーラがその三つである。

第一のエルサレムは、十字軍の遠征でキリスト教徒側が幾度も奪取を試みながら全く歯がたたなかった地であり、あえて赴くからには身の危険を覚悟しなくてはならなかった。第二の永遠の都ローマは、巡礼でなくとも多くの人が訪れている。巡礼者にとって何らかの困難がありそれをのり越えてこそ、時にはすべてを抛って行なつてこそ、聖地参詣を果たした時の満足感が一層大きくなることを考えると、第三の地、遙かなる地の果てガリシアのサンティアゴは最適の地で、ヨーロッパ各地から巡礼が押し寄せ、十一、十二世紀に最盛期を迎え、時には年間五十万人を超える年もあったという。

—
余談になるが、これも巡礼、大巡礼といつてよいであろう。

十七世紀初期のこと。インドのゴアから単身、ペルシア湾を渡り、エルサレムに詣でた日本人がいる。言葉、

旅費、食事、氣候風土、等々、どれをとつても現代の我々には想像できぬ程の困難があった筈だ。人並すぐれた意志の強さと頑健な体がなくてはとうていできないことだ。彼は旅を続け、砂漠を歩いてローマに達し、その地で学問を修め司祭となった。当時日本は禁教令下にあり、そもそもこの旅の発端が六一四年キリシタン禁教令により彼自身マカオに追放された一人であつたので、彼の地に留まることも出来たが、彼は再び帰国を決意した。スペインを通りリスボアに赴き、その港からポルトガル艦隊に乗船して再びゴアに戻つた。マニラ、マカオ、アユタヤ、マカオを往来しながらチャンス待ち、ルパング島から薩摩半島に上陸、潜伏し布教に従事した。最後は仙台領で捕えられたのち江戸に送られた。穴吊りの拷問にも屈せず殉教した。豊後の人、その名はペドロ・カスイ・岐部（一五八七〜一六三九）。

今年（一九〇〇年）はフランシスコ・シャビエルが来日して四五〇年になる。シャビエルに関しては、「麒麟」第二号の「スペイン黄金世紀文学と日本」の中で述べてあるので省略したい。二年後の一五五一年十一月、シャビエルが日本を発ちインドに向かった時、日本人五名が同行した。その一人鹿兒島のベルナルド（日本名不詳）は、喜望峰廻りの航海でリスボアに上陸。ローマに赴いたのち、ポルトガルに戻り、大学の町コインブラに学んだが、健康に

すぐれず一五五七年歿した。ヨーロッパに赴いた日本人留学生第一号である。航海とて、季節風を利用してのもので年一度の機会しかなく、順調にいても相当に体力を消耗した。難破の危険もあり、命がけであった。一つの文書が確実に目的地に届くため数通コピーし、それぞれを異なる経路、船便で送った時代の話である。

三

イスラム圏の巡礼というと、イブン・バットウータ（一三〇四～七八）のことを思い出す。スペインの対岸タンジール（モロッコ）に生まれ、二十一歳の折メッカ巡礼の旅に出、そのあとインド、ジャヴァを経て中国各地を訪れたのち帰郷した。更に、スペインのグラナダやサハラ砂漠を南下する旅など、三十年間当時の世界中を旅した人と言ってよいであろう。時代、情況、目的など異なり、単純に比較できないが、ペドロ岐部の旅はイブン・バットウータに劣らぬものであった。

四

サンティアゴ伝説について種々論じられている。八年、三年、ガリシアの最果ての地（フィニステール）から遠からぬ森の中でサンティアゴ（聖大ヤコブ）の墓が発見されたという報告が、アストゥーリアス王国の宮廷オビエドに届いた。

アルフォンソ二世貞潔王（七九二～八四二）はその地

に聖堂建立の命を下した。当時のアストゥーリアス王国は、南の強大なイスラム勢力に押されて、峻厳なカンタブリア山脈の彼方で細々と独立を保っていた。この出来事は、異教徒に奪われた土地を再びとり戻そうという希望の支えとなった。かくして最初のサンティアゴへの巡礼の道がカンタブリア海沿いにつくられた。

十一、十二世紀の所謂フランスの道は、アストゥーリアス王国が山脈を越えレオン王国に発展し、更に強固なレオン・カステイリヤ王国になった時代、一方南のイスラム勢は、コルドバ・カリフ帝国が崩壊し、昔日の栄光も威力も消失した時代になってからのことである。

八四四年、キリスト教軍とイスラム軍の対峙したクラビーホ（ログローニョ）の戦では、白馬に跨った騎士姿の聖ヤコブが現われ、キリスト教軍を勝利に導いた。それ以降、イスラムとの戦闘の折、キリスト教軍から、聖ヤコブの加護を願って、「サンティアゴ・マタモーロス（イスラム殺しの聖ヤコブ）」の関の声が上がった。

五

コロンブスに続いてアメリカ大陸に渡ったコンキスタドールレス（征服者たち）は、スペインにおいては八世紀にわたるイスラムとの戦いを勝ちぬいた直後であったので、中世的思考から脱け切っておらず、インディオ（非キリスト教徒＝不信心の徒）との戦さにおいて、インディ

オの神殿をメスキータ（イスラム寺院）と称し、戦闘の場でインディオをモローロ人（イスラム）と見立て、「サンティアゴ・マタインディオス（インディオ殺し聖ヤコブ）」と唱えた。（Francisco Morales Padrón 《Los conquistadores de América》, Espasa-Calpe, 1974, p.15）。

また、サンティアゴは戦国時代の日本に輸入された。「敵を威圧するためにあげる鬨の声にもイエス、マリア、軍神サンチャゴなどの名を唱えた…」（一五七五年九月十二日付長崎発カブラルの報告——岡田章雄著作集I「キリシタンの信仰と習俗」思文閣、一九八三年、一一三—一四頁）、と記されているように、日本の戦場にも姿を現わした。

六

サンティアゴという地名はラテン・アメリカ各地にみられる。

スペイン人が海外の土地を奪い植民地としたのは、異端の徒にキリスト教を教え、キリスト教徒、即ち一人前の人間にしてやるんだという、大名義分があったからである。現代からみれば思い上りも甚だしいが、それが時代の思潮であったのである。錦の御旗の下に悪業を重ねる輩は、いつの時代どこにもいる。（大名義分もなくもつと狡猾に悪業を犯した国民もいる）。また、純粹な心で、

危険を承知で信仰のために命を棄てた人も数多いことも事実である。ラテン・アメリカに宗教的地名・人名の多いのはそのためである。サンティアゴという名の多いのも納得できる。

マタモロロスに関していえば、スペインに限ると、Planeta 社が一九九六年に出版した《Atlas de España》には一つも載っていない。一方、《Pequeño Larousse Illustrado》一九八〇版によると、マタモロロス市が、メキシコのコアウイラ州とタマウリーパス州にある。また、メキシコ独立運動において、モレーロス陣営に所属し、対立した副王軍イトゥルビデにより銃殺された司祭マリアノ・モタモロロス（一七七〇—一八一四）が載っている。

CD「永遠のトリオ・マタモロス(ママ)」(ボンバ・レコード)によると、このトリオはスペイン色濃イトローバの伝統を受け継ぎながらキューバの音楽ソンを巧みに融合させたグループで、リーダーは、キューバのサンティアゴ一八九四年生まれのミゲル・マタモロスであると。

もつともmatamorosを辞書で引くと「空威張り屋」と出ていて、「ハテ? こういう個名名詞を持つ個人もしくはその地に住む人々はこういう気持なのかしら」と思ってしまう。